

会後援会。桜狩一鈴木・絃洲帆・重衛一佐野・絃洲佳・紅葉狩一佐藤洲栄・菅公一内田・絃洲心・紅葉狩一三宅洲洋・白虎隊一富田洲寿・羅生門一岡田洲峰・横笛一真泉洲佳・俊寛(上)・中村洲心・吹雪の敵一彼ノ矢洲友・別れの盃一荒川洲博・湖水乗切一宮崎洲月・羽衣一菊地香水・絃甘水・異國の丘一山田洲鳳(上)・海衛一松崎洲陵・鉢の木一平井洲誠・景清(上)・稲垣洲玲・同下・荒川洲帆・瀧陽江一桑名洲聖。外に詩吟二十八題。

筑前琵琶橋会全国大会

十一月十四日(日)十時佐世保市民会館大ホール、主催筑前琵琶橋会、司会佐世保地区橋会。第十四回の催しで今回は琵琶曲を加え全三十三曲を山崎旭萃総範をはじめ彦根、鹿兒島、岡崎、名古屋、松山、東京、平塚、日向、各務原、大阪、川崎、戸崎、藤井寺、交野の各地橋会から独演、合奏など延べ五十四人の選良が技を競い、詩舞、尺八、箏、鳴物並に点前裏千家社中の協賛で盛会を極めて目出度く本年の大事事を終了した。尚翌十五日は総会、懇親会が開催された。

定例研究会

十一月十四日(日)屋敷新宿洲鳳会館、主催日本琵琶協会(有料)。俊寛一関川昌宏・曲垣平九郎一有馬操・若き教盛一齊藤旭芳・彰義隊一前橋悟・新撰組一森中志水・羅生門一田原旭崇・講評一金田一春彦先生。

薩摩琵琶演奏会

十一月十四日(日)十時一十六時浜松市立西部公民館、主催鶴絃会・浜松琵琶協会、後援市教育委員会ほか。金剛石一鈴木外二人・絃

梅原旭瀧秋季演奏会

十一月十四日(日)屋敷京都東山安井金比羅宮会館、後援京都琵琶協会。太田道灌一曾我部、佐藤一石栗丸一辻井常陸丸一佐藤一巴の前・楊一福島旭梅一紅葉狩一山田秋風故郷の山一中谷旭芳一関重次郎の妻一加藤旭晃一新撰組一清水旭翠一坂崎出羽守一木下皇水一堅田落一岡本旭村一神崎雪女一会主梅原旭瀧一寂光院一平井春嶺一安宅の関一來賓竹本旭将一関ヶ原一岡横野旭風。

筑前琵琶保存会演奏会

十一月十四日(日)福岡市大博多ビル十二階ホール、後援県、市教育委員会ほか(有料)。第十八回の演奏会福岡市芸術祭参加。司会大原はるお。君が代一嶺旭蝶、川浪一黒田武士一旭蝶、木山一隅一五条橋一阪部、富義士の本懐一富、飯田一元寇一富、飯田一日原讃歌一下森外九名一扇の的一青山旭子外五名一母里太兵衛一旭蝶外三名一安宅の関一松尾

外二名一秋風故郷山一鶴崎、渡辺一若き教盛一梶野蝶玉一壇の浦一渡辺嶺楓一徳寺一梶野蝶緑一小栗栖一青山旭子一湖水乗切一來賓東京今井鶴朝一合奏みのりの秋一會長嶺旭蝶外四十一名。

ラヂオ・テレビで琵琶放送

△：十月十四日(日)午後三時五分NHK・FMラヂオ、紅葉狩一荒井姿水女史放送。
△：十月十五日(日)午後九時NHK教育テレビ「邦楽百番」の時間帯に扇の的一平山万佐子女史放送。外に箏曲、長唄。
△：十月十六日(日)午後三時朝日テレビ「ワイドサタデー」に福岡市嶺旭蝶女史門下の少女たちによる筑前琵琶放送。
△：十月十八日(日)正午NHKテレビ「秋の近江路の旅」の時間帯に上原まり嬢が筑前琵琶放送。
△：十月二十一日(日)午前七時十五分朝日テレビ「おはよう朝日です」の時間帯に上原まり嬢が筑前琵琶放送。
△：十月二十二日(日)午後三時五分NHK・FMラヂオ「日本琵琶楽コンクール優勝者」で田原旭崇一舟弁慶、田中光水一竜の口、森中志水一小栗栖を放送。
△：十月二十二日(日)午後九時NHK教育テレビ「邦楽百番」の時間帯に壇の浦一板谷旭邑女史放送。外に尺八、舞踊。
△：十一月四日(日)午後三時五分NHK・FMラヂオ、羅生門一山崎旭萃女史放送。

あとがき

今年もとうとうあと一ヶ月で終ります。振り返ってみると誠に悲喜交々の一年でありました。どうぞ健康に充実したお正月を迎えたいと思っております。お申し込みを精々早くお願い申し上げます。

何たる無礼ぞや。和宮つきの女官たちは髪逆たてて怒り、以後、この対立は益々激しさを加えていった。和宮にとってこの結婚が楽しからう筈はない。

けれども、將軍家茂や天璋院と共に浜松御殿へ赴いた時、どうした手違いか將軍の履きものが沓脱ぎに出ていなかった。和宮は急いで着物を揃えた、と、まめまめしく良人に仕えている。皇族である身分を捨て、家茂の妻として生きようと決心したのである。

だが、和宮と同齡の若い將軍家茂は、崩壊せんとする幕府を支えるため、日夜奔走西走せねばならず、その心労がたつたのか慶応二年七月二十日、征長軍を指揮して大阪城へ赴いたまま、二十一歳で病没してしまった。

將軍病むと知った和宮は、塩断ちをしたりお百度を踏んだりして平癒を祈ったという。

斯くて静寛院と名乗る未亡人となった和宮を、京都へ呼び戻そうという議論が起こったけれど、一旦嫁した以上、良人の家である江戸城に踏みとどまるべきだと彼女が決心した。和宮はこれによって徳川家のため、天下万民のために尽くそうと覚悟されたのである。

ところが、その後幕府の方針を見ると、いよいよ朝幕の溝が深まる一方で、開国交易で異人が江戸市中を徘徊する有様で、兄孝明帝の意向に背くこと甚だしい。和宮も外人き

琵琶
機関紙

京

絃

第三四二号 京絃社

おんなの都 (一一)



落合一誠

皇妹和宮(4)

文久元年十一月十五日、江戸城に到着した和宮は、忽ち幕府の裏切りに出逢って深い悲しみに閉ざされねばならなかった。

それは、明年父皇の法事に参列するため京へ帰洛するという条件が、すげなく断わられてしまったこと、江戸大奥に於いても、万事御所風の生活を、と申し入れてあったのに、これを聞き入れられそうにない状況となってきたためであった。

これでは約束が違う、と、一般の輿入れとちがって、では帰らせて貰いますという訳にはいかぬ。

和宮御自身ですら斯様な幕府の態度に泣かねばならなかったのだから、つき従う女官たちの待遇も誠に悪く、日当りの悪い一室にとじ込められ、手紙ひとつ満足に書けないような有様で、和宮つきの女官たちは欺かれたと、悲しんでいる。その上、大奥には大奥

のしきたりがあるといつて、只でさえ意地悪い御殿女中たちが事ごとくに叱言を云ったり、冷笑したりする。御所の風習に慣れた女官たちの目に映る大奥の風俗は、どうにもならぬほど野卑なものに思える。

このように、まず女たちの対立、反感のぶつかりが起こってしまった。しかも大奥には、前將軍家定の御台所天璋院、家定の生母本寿院、現將軍家茂の生母実成院などという姑たち控えている。中でも天璋院は気の強い女で、和宮の土産の表書きに、天璋院とのみ記してあつてどどとてなかつたため、何を小しやくなと眼を怒らせた。

和宮は皇妹である。臣下の天璋院に「どの」はいらぬと、お附きの人は「どの」を抜いた。けれど天璋院にしてみれば、嫁を貰った気である。その嫁が姑に対して呼び捨てとは何事か、と先ずこの一件から嫁姑の対立となった。そこで、いざ対面となると、天璋院は上座

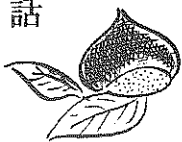
らいであったため、遂に帰京を決意された。

然し時既におそく、幕末維新の大波で鳥羽伏見の戦い、征東軍の進發、江戸開城と時代は急変した。昨日まで天下に号令していた徳川は忽ち没落、朝廷に縋らねばならぬことになる。それには和宮を頼る外はないことにならな

らな、今や和宮は没落した徳川を支える唯一のたのみ綱となり、和宮は徳川家存続のため大いに力をつくされた。

五絃閑話

水藤五朗



このところ上原まり女史の活躍が目立っている。テレビ、ラジオ、そしてステージ、加えて新聞、週刊誌と、ありとあらゆる分野に彼女の名前が登場している。今更、彼女の経歴に触れることはないのだが、やはり、彼女が宝塚の女優であったことは特記しなくてはな

ならないと思う。そして、更に大切なのは宝塚を退団した彼女が、他の宝塚女優がそうであった、いや、あるとは異なって、敢然として琵琶人としての活動を選び、女優専従の道を取らなかつたことである。そして、ここ一年、その彼女の活動は成功していると、私は思う。

今日迄の琵琶界が、一般社会とのかけわりをなかなか持ち得ず、或る意味では、自らそれをなさなまま来てしまった事については、多くの人が指摘し、私もそう痛感している事はくり返し記してきた。その点から云えば、宝塚女優が琵琶界へ戻ってきて、そして琵琶を手に広い世界に踊り出してゆく、それは尊い出来事の様思う。

らないのではないか……と私は思う。

敢えて記すと、それは発声であり、その不自然さと、その為に生まれる歌詞の不明瞭さである。特に、低音になった時にその感を深く抱くのは、やはり今後の彼女の課題であると云える。

ただ、そうした課題は、今後、彼女自信の努力と、周囲の人々の適切な指示で克服されてゆくものと想う。又、そうあってこそプロなのである。

は琵琶界が芸の世界となり、芸を志す人を育て、活動させることにほかならない。

彼女が筑前琵琶を手にして大楠公や、小督を演奏し、その舞台を、多くの若い人々が見入っている光景を見る時、多くの琵琶会が、そうした波と決して無縁であつてはならないのだと思う。琵琶に未知な若い人々に人気のある彼女を、それなりの待遇をして、自己の会に客演として招くと云う主催者もつとあつて良いのではないだろうか。それが芸の世界である他芸にはある。坂東玉三郎の人氣は歌舞伎の衰退を救つたと云われるのだが、それは歌舞伎に未知な十代の人々の間に、彼の人氣が高まって、その波が広まって、歌舞伎を守つたのであつた。ただ、玉三郎を歌舞伎の一人として歌舞伎界は育て、そして活動させている。その点で、琵琶界が、今日の上原まりをその内なる人として活動させることのないままにいる事は、やはり考慮不足である

と云える。

一刻も早く琵琶会を洗練された芸の舞台として一般の社会から認めて貰うためには、宝塚と云う、洗練された舞台に在った経歴を持つ彼女の助力がもっと必要なのではないだろうか。それを琵琶人が求める可きでは

○ ○ ○



元祿忠臣蔵 義士の奮戦を偲ぶ

辻 旭城

元祿十五年十二月十四日。今宵はいよいよ討入りとときまり、午前零時義士打ち揃って吉良邸に向うこととなつた。この夜は、前日の大雪も降り止み、月光輝く大江戸は見渡す限りの銀世界。さいさきよしと義士たちは、ある者は上方へ行き商人となるとか、ある者は

西国で仕官の口が決つたので明日は出発するなどといった家主に断り、荷物を整理して夕刻までには一切の始末を終つた。

新年特別号発行について

来たる一月一日発行の本紙は例年の通り新年特別号とし紙数を増して内容豊富な記事を満載、併せて年賀交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

早いぞ、やがて夜も明けるから、今一度椽の下から長屋まで隈なく探してみよう」と一同を励ました。

氣を取り直した者は、勇氣を出して台所横の炭小屋の戸を掛矢で叩き破って見たが、中は真暗なので槍の先に点火した大ローソクで中を照らし、弓に矢をつがえ四、五本射かけると、奥の方から炭やいろいろのものを投げつけてくるので、再び射かけると逃げ出して来た者があり、すぐに槍で討ち果たしたが、なお人の氣配があるので、間十次郎が一槍突き入ると確かに手応えがあり、すかさず武林唯七が斬りつけて引捕え、引きずり出してみると六十歳ばかりの老人で、年頃や白むく小袖といった服装から見ても、上野介ではないかと思われ、忠左衛門や十次郎らがその面体を改め、額の傷をしらべたがハッキリしない。それではと背中を傷あてを見ると、紛れもなく亡君内匠頭が切りつけた古疵の跡が残っている。かねて目印は額の傷と云われているが、実際は背中の疵跡で、笛の音にちりぬるいろはの浪士は寄ってきた」との川柳どおり、合図の笛で内蔵助以下四十七士の全員が集合、大石が吉良に切腹を奨めるが吉良は女々しく助命を願うため、大石は自分の佩刀を抜いて止めをさし、間十次郎に向って「上野介に最初に槍をつけたのはお手前であるから、首級をあげられよ」と申し渡し、十次郎は一刀のもとに吉良の首を打ち落としてここに首尾よく仇討本懐をとげ、勝鬨をあげたのである。

四絃漫筆(十六)

島津天嶺

琵琶歌雜考(二)

NHKの大河ドラマ「峠の群像」が、史実に反するところが多いと非難されているが、近着の週間朝日(一一・五日号)でNHKのチーフプロデューサー小林猛氏は、「歴史小説、歴史ドラマは事実の骨組みに、フィクションの肉づけをしてはじめて成立します。当然のことですが、どの部分が本当にあったことで、どの部分が作った話なのか、大変まぎらわしくなります。むしろ、まぎらわしくするのが、作家の腕というところさえあるでしょう」と反論しておられたが、歴史琵琶歌にも同じことがいえる、正確に史実を調べ、その大枠の中で作者のイメージを美文で綴ってはじめて名曲が誕生することになる。

しかし今歌われている琵琶歌の中には、史実にマッチしない歌もある。この最もよい例は「湖水渡り」の主人公の明智光俊である。多分この歌が作られた頃の伝承では光俊となっていたのであろうが、歴史学では光春が正当で、このことは琵琶全集のこの歌の後註でも触れているから、やはり光春で歌う方がよ

いように思っている。

さて前述の琵琶全集であるが、これは「日本音曲全集」中の一環として、義太夫や長唄の本とならんで昭和二年に刊行されたもので、琵琶歌だけで五百頁に近く、編集は中内蝶二氏外一名、頭註で歌詞の、また後註で歌曲の註釈がついていて、収録曲数も薩筑併せて百十曲という立派な本で、いわば琵琶歌の本としては「バイブル」的なものであるが、二三おかしいところもある。

そのひとつは桶狭間の歌で、作者が中村秋郊となつてはいるが、これは秋香の誤りであろう。それと、この歌では桶狭間の戦が織田方の夜襲になつてゐることである。史実では永祿三年(一五六〇)五月十九日(太陽暦では六月二十二日)午後二時頃、織田信長の勢が今川義元の本陣に、折柄の豪雨をおかして切り込み勝利をあげたのであるから、この歌は史実に反しているが、どうしたことか歌詞も「あやめもわかぬ闇の夜を」となつており、後註でも「木下藤吉郎、信長に乞うて自ら手兵を提げ闇黒を衝き、突如として夜襲を試み」と桶狭間の戦も太閤さんの殊勲のような表現になつてゐる。

権威?のあるこの本がこのようになってゐるので、この通りに歌われる方も多いようであるが、これは赤穂義士の討入りが朝方が夕方になつたのと同じで、やはり史実にそつた歌を歌わねばならないと思う。私の手許にあるこの歌の原作の写しは「轟

く稲妻、はたたく神、篠を束ねて降る雨を、神のたすけと唄づたい(後は大体同じ)」となつてゐる。御参考まで。

今ひとつ、「花は桜よ人は武士」ではじまる白虎隊の名曲があるが、この歌の作者が大塚盧舟氏となつてゐることである。明治三十八年刊行の吉水経和師編集の練磨集の小田錦蛙作の同名の歌の後の方を削除しただけで、一字一句違わないのだから、どう考えても原作者は小田氏(岡部錦蝶先生の叔父)であると思うが、どうしてこのような誤りが生じたのか、大塚盧舟氏とはどんな人であつたのか、若し御承知の方があれば御教示をお願いしたい。

ここまで書いてきて私にも困つたことが起つた。それは私のこの随筆(9)で紹介したというよりは、筑前琵琶の名曲「秋風故郷山」のことであるが、少し調べて見たら、田原坂の戦があつたのは三月のこと秋ではない。この年は大変な異常気象の年だったので、二月に鹿児島を打ち立つ日に大雪が降り、三月になつても田原坂では雪が降つてゐる。「氷雨降る」は事実であるが秋ではない。従つて「いつしか秋の訪れて」の句は史実に反することになる、といつてこの歌をつくり変えることは作者の抱いていたイメージを打ちくたくようではないかにも忍び難い。やむなく、私はこのうい史実を十二分に知つた上で、この歌を原作通り歌つてゆこうと決心してゐる。桶狭間の歌では史実に忠実であれといひ、

この秋風故郷山ではそのままよいというの、如何にも身勝手なようであるが、前者には立派な原作があるのを「改悪」したところに問題があり、後者では原作を「改良」する力が私には全くないからである。

天女は「疑は人間にあり」といつたが、人間に疑う心があるから物事の探究探索が生じ、新しい成果が得られる。琵琶全集も今までは必要などころを拾い読みした程度であつたが、全巻を精読したら又何か新しいことを見出せるかも知れない。何れにしても自分が歌う歌についてはその史実は勿論、一字一句まで検討して「点の疑」もないようにしておきたいものである。

紅葉狩



京都琵琶協会は、十一月例会に紅葉狩を兼ねて催すことにした。

即ち、晩秋の五日午後一時京福電鉄嵐山駅に、梅原旭清、矢吹旭津美、水内煖水、安住旭康、山岡旭清、高橋正雄、楊嶽水、光子夫妻、平井春嶺・恵子夫妻の十名が集合。折柄の時雨をついて三台のタクシーに分乗し、矢吹女史の知り合いの料理旅館清滝の「ますや」に到着した。

この「ますや」は歌人と謝野鉄幹、晶子が住んでいたとのこと、われわれは到着早々二人が仲睦じく過ごした部屋を見て廻つた。

天井は傘形で、欄間も数寄をこらし、大変結構な造りで、文化財に指定して然る可き建物と拝見した。椽側の窓をあけると、時雨に洗われた紅葉が美事に照り輝き、その下を文字どおり清い清滝の水が激流と流れ、その静やかなことは、浮世を離れた秘境とも感ぜられたが、ふと晶子の

やわはだの熱き血汐にふれもみで、淋しからずや道を説く君

という歌が思いだされた。閑話休題。食事が出来る迄は芸談に時を忘れ、午後四時頃より、川魚料理に舌鼓を打ちつ、梅原女史の巧みな話術に感心させられ、また、平井さんのジョークに笑ひころげ、各人が好き勝手に思ひのままを話し、真に命の洗濯をして、午後六時「ますや」を立ち、二台のタクシーに分乗して帰路に着いた。

この清滝までは天気が良ければ、嵐山から嵯峨野をブラブラ歩き、小督塚、釈迦堂、野の宮神社、常寂光寺、落柿舎、二尊院、厭離庵、祇王寺、化野念仏寺等を見て廻れば、晩秋の洛西のわび、さびが感ぜられ、しみじみ京の良さが解るところである。かのひと悲恋の果てか祇王寺の若き尼僧のひとみ忘れず、これは誰の歌、だつたでしょうか。(X・Y・Z 生)

初の「平家」演奏の旅へ

意欲燃やす筑前琵琶・上原まり
ライフワークの第一歩



筑前琵琶の上原まりが「平家物語」と取り組み、二十一日の大阪を振り出しに、ゆかりの地での初の演奏の旅に立つ。それも自身の作曲をもとに、来年から始める「平家」シリーズへの足がかりとして、琵琶曲の新しい展開に意欲を燃やしている。

日程は二十一日午後七時から大阪オレンジルーム、二十一日同六時半から神戸文化ホールの小ホール(神戸海員会館)二十三日同、高松・オリブホールで。このあと西海伝説の地沖繩、福岡を巡演する。演目は二部に分かれ、第一部は彼女が七月に作曲したばかりの「祇園精舎」と三代家元橘旭翁作曲の「小督」、第二部では、現代の琵琶曲を語りなしで聞かせる「小品集」をはさんで、名曲「大物の浦」を。この間、平家にちなむお話も添える。いずれも二〇〇〇円。

上原は昨春、筑前琵琶旭翁の総師範である母、柴田旭堂の後を継ぐため、宝塚歌劇のトップスターの座を捨てて琵琶演奏家に転身。その後、東京を中心に演奏活動を続けて来た。昨秋からは琵琶曲の原点とされる平家物語に

挑み、東京ジャンジャンで連続上演を重ねてきたが、これをライフワークの一つとするため、今回の企画を実現させた。来年から二年間の予定で、自身の作曲も加えた平家シリーズに打ち込むという。

「琵琶法師が語ったとされる平曲は、声明の旋律に似て現代人には向きません。技術的にも大変です。そこでそのよさを取り入れながら、新しい曲づくりと発表を今後も続けていくつもりです。同時に、薩摩琵琶との合奏。打楽器やモダンバレエとのジョイントリサイタルを実現させ、琵琶の楽しさを若い人たちに伝えるよう努めたい」と、上原はやる気十分だ。

(十月十九日朝日新聞夕刊「原文のまま」写真は省略。なお同日のサンケイ新聞その他にも大同小異の記事が掲載された。)

(予 告)



- ：浜松市音楽祭に琵琶演奏 十二月五日(日) 屋鶴絃会が市音楽文化連盟の一員として小野鶴彦氏以下十四名で新作「決戦川中島」を掛合演奏、一時三十五分から十分間
- ：義士祭琵琶献奏 十二月十四日(火) 京都東山仁王門の本妙寺に於いて義士の墓前に琵琶献奏、京都琵琶協会協賛
- ：義士祭琵琶献奏 十二月十四日(火) 大阪

旭堂会定期演奏会

十月十七日(日)十時半神戸中央労働センター、主催柴田旭堂会、後援柴田旭堂後援会。合奏鳥の曲：大藪旭晶外九人、玉藻の前：大垣旭海、白虎隊：細見、絃旭甫、太田道灌、小林四條、中井、川中島、寅丸、義家、巽旭悦、常陸丸、大泉旭川、絃旭堂、千曲川旅情、倉橋旭蘭、絃旭堂、秋風故郷山、溝脇旭光、玄、茨木、天津八千代。

京都伏見稻荷大社琵琶献奏会

十月十一日(休) 伏見、大阪琵琶同好会協賛。献詩：米原旭智、君が代合奏：一同、城山、西尾、赤垣源蔵、寛、伏見の吹雪、今野、島津旭都、湖水渡り、矢野旭信、菊水の旗、西村旭瑞、花の白虎隊、尾瀬、本能寺、辻旭城、石田旭扇、菅公、朽木旭清、岩壁の母、小林旭滄、大楠公、作花旭友、姫百合の塔、野々村旭信、関ヶ原、石橋旭嶺、堅田落、巻田旭玄、茨木、天津八千代。

「平家物語」を語る

十月二十二日(夕)六時半神戸文化ホール。祇園精舎・小督・琵琶曲小品集。大物の浦の四曲を上原まり独演会(有料)。

錦心流鉦水会演奏大会

十月二十四日(日)十一時逗子市立図書館ホール、主管鉦水会、主催市教育委員会。市文化協会、後援一水会本部ほか。第二十二回の催しで市文化祭参加。紅葉狩、根岸、白山秀水、生川、大高源吾、菅原、吹雪の敵、内山秀水、曲垣平九郎、八木橋亮水、小栗栖、常山英水、新曲黒田武士、脇田湘水、坂崎出羽守、倉沢松水、新曲本能寺、本庄宵水、竜の口、三門葉水、西郷隆盛、会主平野鉦水、新撰組、横濱横溝交水、巖流島、同今井城水、羅生門、大和寺山注水、茨木、川崎早川主水、本能寺、藤沢榎木山水、湖水乗切、末吉希水、小袖乞、小田原鈴木謙水、風林火山、一斉藤妹水、実盛、横須賀山田幻水、夜討曾我、一松岡遊水、松本孝水、高橋狸水、敦盛、神奈川県連会長梅沢嗣水、川中島、東京本部杉本淳水、外に詩吟五題、司会長谷川瀧水。

日本琵琶悠絃会十月例会

十月二十四日(日) 東京都中野区大和町地域センター。門琵琶合奏：錦幽、一峰、新撰組。

琵琶と詩吟・詩舞の会

十月三十一日(日)十一時西宮市立夙川公民館松下ホール、主唱西宮市・市教育委員会、主催西宮琵琶詩吟同好会、後援一水会神戸、大阪両支部。第二十一回の催しで市文化祭参加。会津白虎隊、加藤、城山の月、小池、青葉の笛、村上、菅公、渋谷、吉野山懐古、藤田、西郷隆盛、楊、月下の陣、高原柳水、巴の前、田中珠水、木の宮梅水、湖水乗切、村上湧水、弁の内侍、吉田秋水、重衡、一田村魁水、平泉懐古、川上琵琶、井伊大老、一町紫水、楊貴妃、滝沢花水、琵琶舞小督、生島華水、三浦蓮水、立方水、八甲田山、金沢三宅鶴山、新撰組、福井内田景水、日蓮誕生、木庭旭山、大江山、大阪稲葉卓水、中野淀水、鶴進帳、会主三浦蓮水。外に詩吟二十五、詩舞二、劍舞一題。

琵琶二人の会

十一月二日(火) 深夜二回東京三越ロイヤルシアター。「筑前・薩摩の世界」と題し筑前上原まり、薩摩須田誠舟による小督。大物の浦・城山。武蔵野を公開演奏(有料)。

錦心流一水会全国大会

十一月六日(土)十時東京銀座ガストホール、主催一水会本部。第三十七回錦心祭で本部五氏による「徳が錦心」の合奏をはじめ四十五曲を中央、城東、川崎、鶴岡、大和、八相、横浜、

赤心流琵琶大会

十一月七日(日)十時静岡市宮ヶ崎町プリンス会館魚磯、主催吟詠・琵琶赤心流(会長赤心流鶴翁氏)。第十五回の催しで毎年春は吟詠、秋は琵琶会を十一月三日に県婦人会館で開催されるが今年はこの都合で上記に変更、秋雨げぶる中を疊敷の会場に打ちくつるいだ満員の聴衆を前に定刻開演、先づ萩野鶴津氏の赤心会歌を序奏に門人吟詠三十九、優位者吟詠三、役員吟詠七題のあと琵琶演奏に移り露宮の歌、素原竜堂、衣川、萩野鶴津、紅葉狩り、阿井優堂、狩野の雨、赤心流鶴翁の四氏が終わって会主の挨拶、祝電披露、続いて来賓琵琶、衣川、東京若宮旭登、坂崎出羽守、京都梅原旭濤、石川啄木、同植村実水、上杉謙信、同平井春嶺、相談役琵琶静、小川野水、壽陽江(一)同岡尾鶴城、会主琵琶鶴翁の木(下)赤心流鶴翁、以上で演奏終了、記念撮影に引き続き乾盃祝宴で目出度く閉会した。因みに例年は東京の名手二、三氏が出演されるが今年は病氣や一水会全国大会(別項参照)と日が重なるなどで欠席残念であった。

洲楓会琵琶・詩吟演奏会

十一月七日(日) 東京都麻布十番会館、主催洲楓会本部(会長大館美江子女史)、後援洲楓